

特集

知のポポ

— 軽便鉄道 —

今から84年前の大正3年5月18日
ここ富里の大地に小さな鉄道が開通しました
名前を軽便鉄道八街支線
春には、桜吹雪に吹かれながら
また、坂道では息切れするように
列車は、のんびりと走っていたのです
今となっては、幻となった軽便鉄道
たなびく煙、高鳴る汽笛と共に
列車は再び、思い出に至る路を進んで行きます

序章

思い出に至る路

— 背景 —

現在の八街市一区上代団地付近を、富里へ向かって東進する。車両後方で煙の見える所が八街駅。後ろに見える森は八街中学校のある辺り。（写真：八街市郷土史料館所蔵）



軽便鉄道双合式機関車両
(写真：稲野辺 実氏所蔵)

車両の先頭が逆向きなのは元
来軍用のもので、運転中に敵襲
を受けた場合に、素早くバック
できる構造になっていた。のち
に分割して1両づつ使用。写真
はドイツハノマーク社FW
4430、1905年製(明治38年)で、
車両には鉄道連隊のマークが記
されていた。

そつと

まぶたを閉じてごらん

「ブローグ 軽便旅情」

雄大な大地と青い空の下、寂しげな小
さな駅の待合室に、ポツンと一人の男。
遠くまで続く一本のレール。線路づた
いには満開の桜並木。その桜の香りと和
らいた春の風に、思わず眠りに誘われそ
うな午後のひととき。

―そつと、まぶたを閉じてごらん
―遠くで、汽笛の音が聞こえるよ
―ピーッ、ピーッ

※ ※ ※

「汽笛は右から……」

八街駅からここ富里駅まで五つの駅を
過ぎたら、たぶん列車は満員だ。
乗客は三里塚駅で降りて、きつとお花
見を楽しみだそう。

それでも、あの列車がそんなに鈴なり
になるのは今の季節だけ。桜が散るころ
には、もう、ほとんど乗る人なんていな
くなるんだろ、うけど……」

汽笛の音を聞いて、しばらくたつのに、
列車はいまだにホームに着く気配すらな
い。

ホームの前の土手では、子供たちが鬼
ごっこをしている。駅の裏からは、種穂
を積む荷馬車の雑踏も聞こえてくる。

「駅のわきにある駄菓子屋にでも行っ
て、饅頭でも買ってくるか。確か三つで
五銭だった」

そんなことを考えていても、列車はま
だ遙かあなたにやつと、その姿を豆つぶ
ほどに見せるだけであつた……

※ ※ ※

大正3年5月18日に開通した「軽便鉄
道八街支線」は、富里村東部を縦断し、
三里塚駅から八街駅までの全長13・8キ
ロの単線。支線の名のとおり、本線は当
初、成田駅から多古間を走っていました。
今では、全国にもその姿をほとんど見
ることはない軽便鉄道。当時、富里村を
走り、今は幻となつたその列車とは、ど
のようなものだったのでしょうか。

それは

まるで、おもちゃのような

【軽便概説】

日本で初めての軽便鉄道は、明治21年
10月に四国で開通した伊豫鉄道。車両は
ドイツのクラウス社製。軌道(レール)
の幅は、762ミリ。(以後最盛時で全国
90路線以上走つた軽便鉄道の大半は、こ
の軌道が標準)ちなみに、日本で初めて
の本格的な鉄道である、明治5年の新橋
―横浜間の軌道は1067ミリで、比較

すると約300ミリも狭いことになりま
す。

鉄道という響きは、一般的には蒸気機
関車などを想像しますが、明治20年代半
ばの軽便鉄道は、人力や馬力をけん引の
手段にしているものもありました。

以後は、蒸気、内燃、電気など車両の
近代化が図られ、富里村を初めて走つた
大正3年の軽便列車は、長さ4120ミ
リ、高さ2680ミリ、現在の軽トラッ
クほどの大きさ。「双合式」(写真参照)と
呼ばれる、お尻を向かい合わせた特殊な
構造の、重量約7・5トンの機関車であ
り、専ら客車と貨物車の混成列車として
使用されました。また、昭和5年以降に
はガソリンカーと呼ばれる「気動車」や、
ディーゼルカーが客車専用として走るよ
うになりました。

本線である軽便鉄道多古線は、昭和3
年9月に軌道を600ミリから、省線(国
鉄)並の1067ミリに改修されました
が、支線は廃止となるまで変わらず60
0ミリのまま。

そして、この軌道の幅は全国でもこの
路線にしかない「日本一狭い軌道」で、
そこには、「おもちゃのよう」とも「マッ
チ箱のよう」とも呼ばれた、かわいらし
い列車が、息切れするようにゆっくりと
走っていたのです。

懐かしいふるさと

琥珀色の思い出の中

この汽車に乗ってどこへ行くこうか……